



# 生成 AI を使わない「至宝の時間」を大切に

木村-須田 廣美

皆さん、お元気ですか。最近、疲れが取れなかったり、仕事のスピードが落ちたと感じたりしていませんか。日頃タフな皆さんも、生成 AI の継続的な利用に疲れを感じている頃かもしれません。本来、生成 AI の目的は、仕事の効率化や定型業務の自動化・高度化にあります。しかし、あまりにも効率よく仕事が進むがゆえに、かえって仕事量が増えたように感じることはないでしょうか。ここで誤解していただきたくないのは、私は生成 AI そのものを否定しているわけではありません。情報検索や文書作成、要約、校閲、プログラミングなどにおいて、生成 AI は研究者にとって非常に有用な補助ツールです。使い次第では、研究の質を高め、時間を生み出してくれる存在でもあります。ただし、思考や判断まで委ねてしまったとき、私たちは「考える時間」を失ってしまうのではないかと感じています。

「今日はここまでにしておこう。」アナログ時代には、仕事の区切りを自然に見つけることができました。自分の思考のスピードと作業のスピードに大きな差がなかった頃、私たちはもっと充実感を得ていたのではないのでしょうか。頭の回転が速い人ほど、デジタル環境では少しせっかちになったようにも思います。私は、あえてアナログで過ごす時間を「至宝の時間」と捉えています。デジタルデトックスで得られるゆったりとした時間を、皆さんは何に使いますか。紙媒体の読書やジャーナリング、散歩もその一つかもしれません。

分析化学に携わる私たちは、生成 AI をどのように利用できるのでしょうか。機器分析における測定条件の検討や、予想されるデータの把握など、活用の場面は確実に広がっています。検出器の高感度化とデータ処理用コンピュータの高速化により、私たちは短時間で大量のデータを得られるようになりました。しかし、データが多すぎると、かえって違いに気づきにくくなることもあります。学生時代、私はペンレコーダーの動きを目で追っていました。一つのデータが得られるまでに多くの時間をかけ、少ないデータを並べて考える。その時間は私にとって「至宝の時間」であり、研究の楽しさを実感できる瞬間でした。最近、そのような時間が減ったことに少し寂しさを覚えます。

化学分析を仕事とする者の最後の砦は、試料調製における試行錯誤です。ここで手を抜けば、正しい結果は得られず、データはばらつきます。面倒で避けたい作業かもしれませんが、これこそが人の感覚と経験が生きる、分析化学者にとっての「至宝の時間」なのではないでしょうか。この時間を大切に味わい、小さな発見を積み重ねていくことが、やがて大きな発見につながります。生成 AI に少し疲れたとき、ふと立ち止まり、手を動かして考える。その先に、新たな発見が生まれるかもしれません。

〔KIMURA-SUDA Hiromi, 公立千歳科学技術大学, 北海道支部副支部長〕